

未来の久之浜地区の漁業のために
～地域復興イベントと担い手確保の取組～

いわき市漁業協同組合
久之浜支所青壮年部 阿部智和

1. 地域の概要

私が所属しているいわき市漁業協同組合久之浜支所（以下、久之浜支所）は、福島県沿岸南部のいわき市の北東端に位置し、北部は双葉郡、南部は四倉地区と隣接している。「波立つ海岸」を中心とする風光明媚な海岸線を有しており、いわき市民のレクリエーションの場になっている。しかし、久之浜・大久地区の人口は震災後に大きく減少し、現在 4,700 人となっている。また、人口に占める 60 歳以上の割合は 44% と高齢化が進行し、地域の活力が低下している。



図1 久之浜支所の位置

2. 漁業の概要

久之浜支所には、組合員 85 人、漁船 52 隻が所属している。震災前は底魚類を対象とする底びき網漁業や、コウナゴ等を対象とした船びき網漁業が盛んで、平成 22 年の漁獲量は約 2,200 トン、漁獲金額は約 7 億円といわき市漁協で最大の水揚げを誇っていた。

しかし、東日本大震災に伴う津波により、久之浜支所では漁船 28 隻が全壊し、漁港施設が大きな被害を受けた。また、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で、いわき市漁協では操業自粛を余儀なくされており、現在は市場の評価を把握するための小規模な試験操業を実施している。私の船では平成 26 年 3 月から船びき網漁業、平成 26 年 9 月からカゴ漁業、平成 26 年 10 月からさし網漁業、平成 27 年 9 月から底びき網漁業の試験操業に参加し、本格操業に向けて試験操業の漁業種類を拡大してきた。一歩ずつではあるが、震災前の規模に近づいていることをうれしく思っている。

3. 研究グループの組織と運営

いわき市漁協久之浜支所青壮年部は、部長以下 24 人で組織され、いわき市内の他地区と比較すると若い漁業者が所属していることが特徴である。主な活動内容は、県漁青連の各種行事や研修会への参加の他、地域で行われる各種イベントに参画し、運営の中核を担っている。こうした活動は、東日本大震災により一時途絶えていたが、徐々に活動が再開され、震災後は、被災した久之浜地域において、漁業を核とした地域復興や水産物の消費拡大に向けた活動に力を入れている。また、長引く操業自粛により、若い漁業者の浜離れや漁業技術の継承が絶たれることが懸念されることから、漁業技術の研修活動も行っている。

4. 実施活動取組課題選定の動機

いわき市久之浜地区は、漁業者だけでなく、仲買業者など水産流通に関連した住民も多く、久之浜漁港を中心に漁業とともに暮らしてきた地域であるが、東日本大震災により、沿岸部のほとんどの家屋や施設が壊滅的な被害を受け、地域の活力低下に一層の拍車がかかっている。震災からの地域の復興のためには、漁業の復興が最も重要であり、地域住民からも漁業の再開が強く望まれている。一方、漁業においては、原発事故による風評や長引く操業自粛による若い漁業者の浜離れ、漁業技術が継承されなくなる懸念など多くの課題がある。そこで、震災以前に地区のイベントなどで中心的役割を果たしてきた当青壮年部が、地元商工会議所等と連携しながら、さまざまな取り組みを通じて地域の活性化や魚食普及を図ることとした。また、震災後停滞していた青壮年部活動の一環として、漁業技術の継承を目的とした研修活動に取り組むこととした。

5. 研究・実践活動の状況及び成果（または効果）

（1）風評払拭に向けたイベント

（ア）海からの恵みに感謝・海と山の交流会

久之浜・大久地区と石川町は2009年から交流を続けている。震災直後は毛布や飲料水、がれき撤去ボランティアなどの支援を受け、大変お世話になった町でもある。山間地域に住む石川町の子供たちに漁業の魅力伝えるため、今年は漁業見学を実施した。さし網漁法を見学するため、操業船1隻と見学船3隻で出港し、揚網の様子を見学させた。私は見学船に乗船して子供たちに漁法や魚の説明をしたが、インガレイやカスベなどの大きな魚が揚がると子供たちから歓声が上がりうれしかった。普段スーパーで見ている魚がどのように獲られているかを実際見て感じてもらうことで、子供たちの漁業や魚に対する見方が変わったのではないかと思う。帰港後、試験操業で漁獲されたヒラツメガニのカニ汁とホッキご飯を昼食で提供し、久之浜産の魚介類のおいしさと安全性をPRした。子供たちからはおいしいとの声が上がリ、普段なかなか食べられない海のごちそうに大喜びだった。

こうした取り組みにより地域同士の連携が強くなっていることを実感している。そして、漁業の魅力と地元水産物のおいしさ、安全性を知ってもらい発信してもらうことで、風評払拭につながると考えている。また、石川町は農林畜産業・観光業などで風評に苦しんでおり、同じ境遇にある地域同士、今後とも交流を続け、石川町の風評払拭のために少しでも役に立ちたいと考えている。



図2 開会式の様子



図3 漁業見学

(イ) 第1回久之浜漁港魚まつり

震災前に久之浜漁港では毎年「久之浜漁港祭り」を開催してきた。これは地域振興のためのイベントで、毎年1万人以上の来場者があった。しかし、震災以降、操業自粛等の影響でこうした大きなイベントを開催できずにいた。また、試験操業の水揚げ量は震災前の数%程度で、地元住民に久之浜産の水産物を届けることができず、安全性のPRができなかった。そこで、久之浜支所が中心となり地域の住民を対象として平成27年3月に第1回久之浜漁港魚まつりを開催した。現在、久之浜の市場は壊れたままで、試食で提供する料理を作れる場所も限られ、販売も屋外にテントを張って行うなど、多くの問題があったが、地域や市などの協力もあり、何とか実施することができた。内容は、試験操業で漁獲された鮮魚販売や調理品販売（メヒカリ唐揚げ、ニクモチ南蛮漬け、タラのフライ、アサリご飯）、無料試食（シラウオすまし汁、カニ汁）であった。地域住民を対象としたイベントではあったが、来場者数（1,800～2,000人）と売上は良好で、準備していた商品は昼までに売り切れた。これにより、いかに地元の人々が久之浜の漁獲物を待ち望んでいたかが分かった。また、地域住民が一堂に会するイベントは無く、来場者同士が再開を喜ぶ姿もあり、久之浜地区における水産業の重要性をあらためて感じた。今年度も久之浜支所が中心となって魚まつりを開催する予定である。将来的には、こうした取り組みを定期的で開催し、風評払拭と消費拡大につなげていきたい。



図4 試食提供



図5 加工品販売

(2) 地域活性化に向けたイベント

(ア) 浜の夏祭り（花火大会）

震災後に漁業ができず、気持ちが折れそうになっていた時に、地域の復興につながるイベントが何かできないかという話が青壮年部にあった。そこで、地域のみんなが話し合い、昔の久之浜地区の活気を取り戻すためのイベントとして、花火大会を50年ぶりに復活することとなった。これは、花火大会のような大きなイベントを開催すると、地域住民の交流が生まれ、避難住民の帰還が進むと考えたからで、われわれの思惑どおり、花火大会は毎年盛況で、地域人口の2倍以上にあたる1万人以上が



図6 花火大会ポスター

来場した。昼のライブイベントに始まり、夜には1万発の花火打ち上げと盆踊りが行われ、市内の商店等50店舗の協力で露天を出店し、とても盛大なイベントとなっている。

花火大会にはわれわれ青壮年部が主催者として携わってきた。これは、久之浜・大久地区を活気づけることが、長期的に見ると水産業の復興につながると考えたからである。この取り組みは地域のイベントとして定着しており、地域活性化の一翼を担っている。今後とも主催者として地域を元気にするために、内容を改良しながら携わっていきたいと考えている。



図7 取材を受ける青壮年部長



図8 イベントの様子

(3) 担い手確保に向けた取り組み

(ア) 漁業研修

久之浜支所青壮年部では、県および国の補助事業を利用した漁業研修を平成25年から3年間継続して実施してきた。震災後、漁に出る機会が少なくなり、がれきの撤去ばかりやっていた時期にこの話が来たので、すぐに参加することを決めた。内容はカゴ漁業、さし網漁業、船びき網漁業の操業方法(投網・揚網方法、探索方法、漁獲物の鮮度保持方法)をベテラン漁業者に教わるものだった。

私は22歳から父親の船に乗り込み、父親から技術を教わってきたので、他船のベテラン漁師から教わる機会はとても新鮮で、より操業方法について理解が深まったように思う。今後とも研修に参加し、教わった技術を操業で試していきたい。また、青壮年部の若い漁業者と同じ船に乗り、操業することも初めての経験だった。担い手同士刺激し合いながら研修することで、漁業再開に向けてのやる気が湧いてきた。



図9 船びき網研修



図10 カゴ研修

漁業研修で技術を教わることで、近い将来に地域漁業を担うわれわれ若い漁業者の技術が向上し、将来的には地域の漁業生産の安定につながると思う。また、担い手同士と一緒に研修することで、漁業に対するモチベーションの維持につながっている。

6. 波及効果

これまで青壮年部で実施してきたイベントや漁業研修は、地域住民や他地域の住民、漁業の担い手同士が共同で実施してきたもので、目標は地域と漁業の復興であった。皆で意見を出し合いながら、同じ目標に向かって取り組んできたことで、住民同士や地域同士、担い手同士の絆が強くなったと感じている。こうしたつながりは今後の復興に向けて大きな強みとなるものと期待している。また、われわれ青壮年部員が地域漁業の担い手のみならず、地域全体の担い手として復興に向けて中心的な役割を担うべき立場にあることを強く感じるようになり、地域の担い手としての自覚が芽生えてきた。

7. 今後の課題や計画と問題点

(1) イベントの開催方法について

これまで実施してきたイベントの多くは地域住民を対象としたもので、都心部などの関わりの少ない地域の人たちに対する風評払拭のためのイベントを行う必要性を感じている。試験操業中の今がこうした取り組みのチャンスであり、開催場所やPR方法を工夫するなど、開催方法を再検討して対象を広げていきたい。また、イベントの来場者数を増やしていくために、来場者数の多い他のイベントと同時開催するなど、より多くの人たちに久之浜の水産物をPRしたい。

(2) 漁業研修について

漁業研修に関しては参加者を一般から募ることが必要と感じている。地域の現状では、漁家の子弟のみで漁業者数を維持することは難しく、一般の人から広く研修への参加を募り、漁業体験させることで漁業就業希望者を発掘、育成していくべきと考えている。

(3) 「常磐もの」ブランド回復に向けて

いわき市漁協で水揚げされた漁獲物は築地等で「常磐もの」と呼ばれ、震災前は高い評価を受けていた。特に、「メヒカリ（アオメエソ）」は、私が子供のころには評価が低かったが、平成13年10月に市の魚に制定され、値段が4～5倍まで跳ね上がった。しかし、風評により、「常磐もの」ブランドは地に落ちてしまった。現在、いわき市内の漁業関係者が一体となって「常磐もの」をキーワードとして各種プロモーション事業を展開しており、青壮年部としてもこうした事業を活用して、より広域にいわき産水産物のおいしさを伝えていきたい。また現在、女性部が中心となり、いわき産水産物の魚食普及（料理教室・レシピ作成）を行っており、青壮年部としても女性部と連携して取り組み、再び「常磐もの」と呼ばれ、高評価されるように尽力していきたい。

こうした取り組みにより、私の子供や孫の代まで久之浜の漁業を継承していきたい。



図11 常磐ものロゴ